

博 士 学 位 論 文

内 容 の 要 旨 及 び
審 査 結 果 の 要 旨

第 5 集

平 成 24年 3 月

大 手 前 大 学

は し が き

本冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、平成 24 年 3 月 17 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した「博第〇号」は学位規則第 4 条第 1 項によるもの（いわゆる課程博士）である。

目次に記載の報告番号は学位規則第 12 条によるもの（文部科学省への報告番号）である。

目 次

| 学位記番号 [報告番号] | 学位 | 氏名 | 論文題目 | 頁 |
|----------------------|-----------|---|-------------------|---|
| 博第 6 号 [甲第 6 号] | 博士 (学術) | <small>つちや</small> 土屋 <small>ともこ</small> 知子 | 夏目漱石『三四郎』の比較文化的研究 | 1 |

| | | |
|---------|-------------------|--------|
| 氏名 | つちやともこ 土屋知子 | |
| 学位の種類 | 博士（学術） | |
| 学位記番号 | 博第6号 | |
| 学位授与年月日 | 平成24年3月17日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | |
| 研究科・専攻名 | 比較文化研究科 比較文化専攻 | |
| 学位論文題目 | 夏目漱石『三四郎』の比較文化的研究 | |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 | 上垣外 憲一 |
| | (副査) 教授 | 柏木 隆雄 |
| | (副査) 名誉教授 | 松村 昌家 |

論文内容の要旨

『三四郎』は、明治41年（1908）9月1日から12月29日まで全117回東京・大阪両『朝日新聞』で連載された＜新聞小説＞である。

作品は「東京帝国大学」という日本のトップエリートたちが集う場所、東京本郷界隈の文化・風俗を中心に描かれ、「帝国大学運動会」、「団子坂の菊人形」、「文芸協会の演芸会」など、同時期または前年に新聞に掲載された話題の場所が、小説の中に登場する。

本論では、そこに描かれている風俗や風景は、小説に華を添える単なる「小道具」として描かれているのではなく、相当な意味づけをもって描かれていることを論証した。

第一章では「東京帝国大学運動会」という風俗を通して、日露戦争（1904～5）後の明治日本の一つの姿を明らかにし、第二章では東京帝国大学の「正科生」と「撰科生」の差違を明示した。第三章第四章では、「女学生問題」やクリスチャンの女性等同時代の女性の問題を傍証としながら、野々宮よし子と里見美禰子について考察した。第五章から第六章は、「文芸協会の演芸会」「菊人形」といった風俗への漱石の感想から、漱石が持つ「小説」に対する考えを論証した。第七章では小説を書く上で重要であるヒロインのキャラクター造型について、『三四郎』とイプセン『ヘッダ・ガブラー』を比較考察した。第八章では、里見美禰子が抱える苦悩を、ラファエル前派の画家達が好んで描いた＜水に飛び込む女＞や、ヴィクトリア朝ロンドンの女性の生き方を含めて浮き彫りにした。最終章では、美禰子の抱える苦悩は、肖像画「森の女」に描かれたのかどうか、画家原口のモデルとされる黒田清輝と当時の日本画壇等と関連づけながら、漱石の文芸・美術批評を手掛かりに読み解いていった。

『三四郎』のヒロイン美禰子は、一見華やかで西洋風の教養溢れる女性であるが、唯一の家族である兄が結婚すると、三四郎が名古屋で同室になった「汽車の女」や、鉄道に飛び込み自殺した女と同じく頼るべき人も帰るべき家もない女性となる。美禰子の孤独は、小説には現れず、彼女が佇む「崖の上」が、その立場を象徴しているように、漱石は『三四郎』の中で、登場人物達が持つ深刻な問題を深刻には描かない。個々のエピソードや風景、風俗に象徴的な意味を持たせて描いているのだ。そのため、話の筋だけを追っていると、主人公三四郎の大学生活と淡い恋愛を描いただけにしか受け取られないが、それぞれ背景として描かれている事柄を丁寧に読み取っていくと、そこに重要な意味が隠されていることが分かる。

では、漱石はなぜ、このような方法をとったのだろうか。

一つには、漱石が、自然主義の赤裸々な描写を好まなかったことが挙げられるだろう。田山花袋が言うような「露骨なる描写」（田山花袋『太陽』明治37年・1904）を避け、登場人物達の内面には深く立ち入らない手法を用いて、シリアスなテーマを描き出そうとした。

二つめは、明治41年（1908）3月26日に起きた森田草平と平塚明子の「煤烟」事件から、天性のまま男を翻弄する「無意識の偽善家」^{アンコンシャス ヒポクリット}であるヒロインを描こうと試みており、「イブセンの女のような所がある」ヒロイン美禰子を創造する。美禰子は、『ヘッダ・ガブラー』のヘッダのような自我の強さを持った自由奔放な女性であるが、ヘッダほど「徹頭徹尾不愉快な女」（「文芸の哲学的基礎」）としては描かれていない。それは、ヘッダのような因習に捕らわれない女を日本の風土に適するように創造した結果であり、漱石はイブセンのように作者の「哲学」を剥き出しにしない方法で、近代的自我に目覚めた女性の限界を現そうとした。

さらに、明治28年（1895）からたびたび世間を騒がせた「裸体画」のように、対象をありのままに露骨に描くということも、漱石の美意識に反していた。

このようなことから、漱石は、自身の考えを前面に押し出すことも、登場人物たちが抱える問題の全てをつぶさに語り尽くすこともせず、それぞれの風景や風俗描写に意味を託すという方法をとったのである。

それは、俳句や俳画、文人画に見受けられるような「余韻」「余白」の美学とっていいかもしれない。幼い頃から南画に親しみ、自身もよく水彩画を描き、俳句を詠んだ漱石ならではの感性でもあったといえるだろう。

作品にシリアスな問題の暗示を読み取ることは、絵解きする能力を読者に要求するといえよう。しかし、それを読み取ることでできない読者を置き去りにすることなく、＜風俗小説＞としても楽しめる要素をふんだんに盛りこんである。そのシリアスな要素と風俗的な要素のバランスが『三四郎』の大きな魅力となっている。

漱石は、談話「現時の小説及び文章に付て」で、事件で人を楽しませる小説は「発達せぬ読者」に向って作るものであり、「発達せる読者」は、「事件を述べる為の小説」では満足しないと語っている。これは、朝日新聞に入社する前に発表された談話であるが、既に漱石は二つのタイプの読者を認識しており、この後明治41年（1908）に朝日新聞に入社し、新聞小説を書き進める際に、これら二つのタイプの読者を同時に満足させることを意識したに違いない。

『三四郎』の中には事件らしい事件は起こらない。けれども「菊人形」「運動会」「展覧会」「演芸会」といった沢山の行事が鮮やかに描き出される。それら明治40年代の風俗は、「発達せぬ読者」には、小説を彩るための点景や娯楽的要素としてしか映らないかもしれないが、漱石はそれらの風俗の背後に隠された、急速に西洋化し近代化への道を押し進んでいた明治日本と、そこに生きる若者たちが抱えるシリアスな問題を読み取ることを「発達せる読者」たちに期待しているのではないか。

審 査 結 果 の 要 旨

審査対象となった論文、「夏目漱石『三四郎』の比較文化的研究」は、明治四十年代東京の風俗を華やかに織り込んだこの小説が、そうした風俗描写が、一種の文学的象徴として用いられていることにまで踏み込んで分析することを試みた作品である。

舞台となった東京帝国大学、その運動会、近くの本郷界隈の行事「菊人形」、文芸協会の『ハムレット』上演、あるいは絵画展覧会など、首都東京の風俗絵巻と見えるものも、作者漱石の文明批評、あるいは芸術観・美学を表出するための道具としての機能を小説の中で持っていることが本論によって明らかにされている。

事件性のある女性の自殺も、一見新聞記事の取材に過ぎないような出来事だが、主人公の美禰子がイプセンのヒロインに比較されることを対照すると、ヒロインの自殺で幕を閉じる『ヘッダ・ガブラー』への連想が浮かび上がることになり、『三四郎』理解への新たな切り口が浮かび上ってくるのである。

同時に、本作品で言及、あるいは暗示されている絵画作品の分析から『三四郎』に込められた漱石の創作意図を探り当てようとする本論文の取り組みは、相当程度にまで成功していると評価することができる。

以上を総合して、本論文は本学の博士学位に充分ふさわしいものであると認められる。

博士学位論文 内容の要旨及び審査結果の要旨（第5集）

平成24年6月1日発行

編集・発行 大手前大学大学院

〒662-8552 兵庫県西宮市御茶家所町6-42

TEL 0798-32-5009
